

鎖

《沿革および特色》

鎖製造業は姫路市白浜町(南部海岸地帯)を中心に約25社が生産を行っており、全国生産高の約60%を誇っている。

当地には、徳川中期より松原釘と呼ばれる釘の火造鍛造技術が発達しており、それが明治の中ごろ船釘の製造に替わった。そして大正5年、大阪から鍛造による鎖の製法が導入されたことが姫路の鎖製造の始まりとされている。

その後、第二次世界大戦中に細物の電気溶接機が開発され、昭和32年には外国製の大型溶接機(フラッシュバット)を導入、順次国内産による溶接機に移り、現在では火造り鎖はほとんどみられない。当産地の鎖は、線径が数十ミリのものから自動車のタイヤ鎖よりも細いものがあり、また材質もアルミなどの製品があり、多様化している。

《団体(問い合わせ先)の状況》

近畿製鎖協同組合 〒672-8023 姫路市白浜町甲402

TEL 079(245)1471 FAX 079(246)1896

ホームページ <http://kinkiseisa.jp>

《事業活動》

- (1) 副資材の一括購入
- (2) 運転資金の貸付
- (3) 製品別各部会において共同研究

ボルト・ナット

《沿革および特色》

兵庫県におけるボルト・ナットの製造業者の地域分布は、主にボルト・ナット両方を製造している神戸市地域と主にナットを製造している姫路市地域に大別することができる。

ボルトは神戸市内を中心に産地が形成され発展してきた。最も古い業者は大正10年頃に創業した。

神戸市にボルト製造業が発展した背景として、地域内に造船、製鉄、機械などの大企業の生産拠点が数多く立地し、各種ボルトの一大消費地であったことが挙げられる。当産地には大企業との協力または下請関係にある企業が多いものの、近年、大阪・東京などの他地域への販路拡大や海外への輸出などを積極的に推進している。

一方ナットは、造船で使用されるポンチカスを利用した手打ち火造りの「和ナット(丸製ナット)」の製造から始まった。当時、ねじ立ては手回しのタップで行われていたが、ナットの製造が活発化するのには、明治末期頃からである。

昭和2年頃に平製ナット機が導入されるに及び、従来の丸製ナットから順次平製ナットに移行した。さらに昭和10年頃に丸鋼からナット素材を形成できる新しい丸製ナット機が導入され、再度丸製ナット

トの生産量が急増した。

昭和30年代後半には、海外で開発された熱間ナットホーマーが国内に輸入され、より高精度な製品が製造されるようになった。

現在、機械系工業の高度化・近代化につれてメカトロニクス、ロボット生産に必要な精密・高級な製品分野が新しい需要を生む方向にあるため、業界は製品の多様化・高級化など質の転換と安価な輸入品との共存を今後の課題として取り組んでいる。

《団体（問い合わせ先）の状況》

兵庫県鋸螺釘工業協同組合 〒650-0011 神戸市中央区下山手通4-16-3 兵庫県民会館3F
TEL 078(331)2045 FAX 078(331)2095

《事業活動》

- (1) IT化の普及および規格（ISOなど）への対応
- (2) 人材育成並びに情報の提供
- (3) 市況の安定化

利器工匠具（三木金物）

《沿革および特色》

三木金物は安土・桃山時代、当時の領主別所氏の保護下で成長した。しかし天正8年(1580)、豊臣秀吉が三木城を攻め落とすと、三木に定住していた大工や鍛冶が離散した。秀吉は三木の復興に努め、別所氏の保護政策を引き継ぎ、年貢の減免措置等を行ったため、再び多くの大工、鍛冶が集まるようになった。

三木金物は、伝統的な和鉄、和鋼の鍛錬によって鋭い切れ味を誇っていた。

明治30年頃、洋鉄及び洋鋼の導入に成功し、今日のような全国展開の基礎をうちたてた。販路の拡大と共に、時代の要請に基づき従来ののこぎり、のみ、かんなどの大工道具のほか新しい製品が製造されはじめた。具体的には日清、日露戦争の軍需に対応し、ショベル、スコップなどを製造する近代的な工場が創設された。

大正6年、兵庫県立工業試験場(工業技術センター機械金属工業指導所)が設置され、学術研究、技術指導、品質向上、機械化などに貢献した。

第二次世界大戦の勃発により、企業の統廃合が強制され、三木金物も軍需生産に転換した。戦後は、荒廃した国土の復興と建設が始まり、大工道具需要の急速な拡大に対応することが急務となった。三木ではいち早く軍需から民需への再転換が行われ、設備の近代化や販売網の拡張が進展した。その後、高度成長期を通じ、三木金物の販路は一層拡充された。

輸出は、米国を中心に欧州、韓国、東南アジア、豪州等世界各国に向けて行われるようになった。販路開拓のため、ドイツケルン市での見本市には毎年参加している。

近年では、電動工具の発達や新建築様式の普及に対応した新建材用具の開発、生活様式の多様化に対応するための日曜大工用品、作業工具、園芸用品等の開発が行われた。また伝統技術を応用し、農業機器用に組み込まれる刃物や部品の生産も活発である。

昭和60年秋に始まった急激な円高の影響で、産地ではコストダウン、円建て輸出などの対策に取り組んだ。そして昭和62年以降、公共工事や住宅建設の盛り上がりとともに国内景気が回復し、三木金物の生産・出荷は伸張した。

しかし、阪神・淡路大震災以降は、建築工法の変化やゼネコンの不振、安価な中国製品の輸入拡大、消費不況などにより、従来のような出荷・販売は望めない状況となっており、多様化する消費者ニーズに適応する新製品開発に応じた設備投資も企業規模からすれば困難である等、抱える問題は多い。

平成8年には播州三木打刃物として鋸、鑿、鉋、鋸、小刀が国の伝統的工芸品に指定されるとともに、平成20年2月29日、「三木金物」の地域団体商標を取得した。

《団体（問い合わせ先）の状況》

三木金物商工協同組合連合会 〒673-0431 三木市本町2-1-18

TEL 0794(83)5305 FAX 0794(82)3188

三木工業協同組合 〒673-0431 三木市本町2-1-18

TEL 0794(82)3154 FAX 0794(82)3188

全三木金物卸商協同組合 〒673-0433 三木市福井2426 番地

TEL 0794(82)7050 FAX 0794(82)3430

ホームページ <http://www.miki-kanamono.or.jp>

《事業活動》

- (1) 共同仕入等の共同事業の推進
- (2) 経営基盤強化支援事業
- (3) 販売促進に関する事業
- (4) 新商品及び新素材（チタンなど）の研究・開発事業
- (5) IT 化支援事業
- (6) 教育情報の提供
- (7) 生産流通対策事業
- (8) 環境整備事業
- (9) 金融の小口あっせん

家庭刃物（小野金物）

《沿革および特色》

家庭刃物は古くから小野市を中心に発達し、剃刀、鋏、包丁類の家庭刃物の製造は江戸時代に農家の副業及び家内工業として小野周辺に広まり、三木金物(利器工匠具)とともに地域経済の発展に寄与してきた。

延享年間(1744～48)に剃刀(又右衛門、大島町)が製造されたのをはじめ、文化3年(1807)に握鋏(宗兵衛、長尾町)、文化年間に包丁の製造が開始されたと伝えられている。

その後も生産技術の改良や機械化が行われ、特に明治時代に品種が多様化した。明治44年には刃身にさや付けをしたナイフ(井上仁三郎、小野町)が開発され、小刀を改良した現在の包丁が考案された。

さらに、握鋏の不振から昭和5年ラシャ切鋏が研究開発され、池ノ坊鋏、剪定鋏、散髪鋏なども生産されはじめた。このような流れとともに業者数も増大し、小野周辺地域は刃物産地としての基盤を確立した。

家庭刃物業界の業態は、典型的な家内・零細工業として今日に至っているが、時代の流れとともに、近代化され、協業化、機械化が行われている。

《団体（問い合わせ先）の状況》

小野金物卸商業協同組合 〒675-1378 小野市王子町字宮山800-1

TEL 0794(63)3562 FAX 0794(63)7790

播州小野二ギリ鋏組合 〒675-1316 小野市天神町827

TEL 0794(62)3812 FAX 0794(62)3812

小野池之坊・剪定鋏部会 〒675-1334 小野市大島町512

TEL 0794(62)2419 FAX 0794(62)2419

小野利工園芸部会 〒675-1377 小野市葉多町734

TEL 0794(62)5081 FAX 0794(62)6214

《事業活動》

- (1) 小野市の伝統ある鍛造による家庭刃物などを広く社会に普及・浸透させるため、見本市・展示会・教育研修等総合事業を開催、また新市場開拓事業を行政の支援を受け継続的に実施している。
- (2) 生産者・販売者による共同研修会の開催
- (3) 青年同友会の支援など事業承継二世の会育成と新製品の開発事業
- (4) 傘下の小野金物卸商業協同組合では積送品に係る運賃共同事業、高速道路通行料にかかる共同業務等を行っている

鎌

《沿革及び特色》

小野市を中心に生産されている播州鎌は200有余年の歴史を持ち、全国生産量の約6割を占めている。

現在の鎌は、明治維新後、旧一柳藩のお抱え刀鍛冶であった藤原伊助が剃刀（カミソリ）の製造技術を鎌に応用したのが起源とされている。以後「カミソリ鎌」と呼ばれ、その鋭利さが消費者に評価され受け入れられた。

当産地は、このような学理と機械力の導入に成功したのに加え、明治12年頃に問屋勃興で全国に販路を開拓して他産地を圧倒し、その全国的地位を確立した。その後、複合鋼材の開発(大正8年)により、品質や生産性の向上、かつ廉価生産がなされ、近郊農家の副業として普及、発展した。さらに昭和12～15年頃には朝鮮、東南アジア、満州にも進出し、最盛期を迎えた。戦後は農業の機械化、輸出減少等の社会情勢の変化で、一時停滞期があったが、品質の改良、生産技術の向上、また最近ではオートメーション化等の研究が蓄積され、高度化が進んできている。

現在の製品の特色は、①消費者ニーズに対応するため多様性に富むこと、②刃が薄く研ぎやすいこと、③切れ味が良く、刃こぼれも少なく、錆びにくい高級品であること等であり、全国的な評価は高い。種類も片刃鎌、両刃鎌、鋸鎌、背付鋸鎌、ねじり鎌など多彩である。しかし、農作業の機械化など近年は需要が減少している。

《団体（問い合わせ先）の状況》

小野金物商工協同組合連合会 〒675-1378 小野市王子町800-1

TEL 0794(63)3562 FAX 0794(63)7790

ゴルフ用具

《沿革および特色》

わが国におけるゴルフの歴史は明治34年、英国人アーサー・H・グルームが六甲山に4ホールからなる「神戸ゴルフ倶楽部」を開設したことに始まった。その後ゴルフは、神戸在住の欧米人の間で大正末期頃から盛んになった。

日本製のクラブの製造が始まったのは昭和初期であり、シャフトは埼玉県で製造され、アイアンヘッドは姫路市で製造された。アイアンヘッドの生産のはじまりは、①昭和3～4年、廣野ゴルフ倶楽部の造成工事中に廣野ゴルフ倶楽部より三木市内の金物工業試験場にグリーンのホールカップ切りと共にアイアンヘッドの製造研究の依頼があった②外国製クラブのアイアンヘッドの修理依頼があったのをきっかけに、国産アイアンヘッドの製造研究が始まったなど諸説あり、どの説が正しいのかは明らかになっていない。アイアンヘッドは、当時担当者だった松岡文治氏が研究の末に完成させた。

昭和5年に松岡氏は工業試験場を退職し、姻戚関係にあった森田清太郎氏とともに姫路市でアイアンヘッドの製造を始めたのが、日本におけるアイアンヘッド製造の始まりである。

昭和10年頃、ゴルフ倶楽部の整備の進行とともに、アイアンヘッド製造も軌道に乗り始めたが、日中戦争とそれに続く第二次世界大戦中は、ゴルフクラブの製造・販売は全面的に禁止された。

戦後の昭和30年前後には、姫路において専門の職人の独立により6～7社のゴルフメーカーが誕生し、本格的な生産を再開した。昭和40年代に入ると、高度経済成長と余暇志向があいまってゴルフ人口が増加し、ゴルフクラブの生産は昭和48年のオイルショックの前に最盛期を迎えた。

50年代以降になるとカーボン、ポロン、メタル、チタンなどヘッドやシャフト用の新素材が登場し、それぞれ新たな需要を喚起した。

産地構造を見ると、ゴルフ用具製造メーカーの多くは中小零細企業である。クラブの高級化に伴い、経験やカンを頼りにする従来の慣習から脱皮し、経営の近代化を行うことによって体質改善を図り、内外に通用する製品づくりの必要性が高まっている。

それに対応して、業界は昭和56年に姫路GM友好クラブ（任意団体）を組織し、企業相互の交流を図るほか、情報収集、製品技術開発に努めている。

《団体（問い合わせ先）の一覧》

ひめじGM友好クラブ 〒679-2203 神崎郡福崎町南田原3002 (株)さくらゴルフ内
TEL 0790(22)0415 FAX 0790(22)5468

釣具

《沿革および特色》

釣竿・釣用品は、昭和21年頃より山南町（現丹波市）内で製造が始められた。全国的に釣り用品の需要の増加により産地の売上も順調に推移し発展を遂げた。

現在、山南町とその周辺地域（西脇市等）で製造される釣具の生産量は全国の約10%を占めており全国の釣具店、釣具卸売業にもブランドやその品質は認知されている。

又、特産品の鮎毛鉤は国の伝統的工芸品に指定され、釣用品と並んで町を代表する特産品として日本全国に知られている。

《団体（問い合わせ先）の状況》

中兵庫釣具組合 〒669-3154 丹波市山南町梶425-5 宇崎日新(内)
TEL 0795(76)0138 FAX 0795(76)1792

《事業活動》

- (1) 釣り大会の実施（2年に1度実施）
- (2) 組合員の事業に関する経営や技術の改善向上、組合事業に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供
- (3) 組合員相互の親睦を深め、釣場の研究等現状把握をするため家族ふれあい釣場研修を実施
- (4) 組合員研修の実施（県の中小企業対策、補助金等）
- (5) 販路活路開拓事業の実施

釣針

《沿革および特色》

加東市、西脇市及び丹波市周辺の釣針製造業は、徳川末期に飢饉救済手段として、土佐の国(高知県)から釣針製造技術が移入され、農家の副業として創始された。

明治末期から大正初期にかけて手工業から機械製釣針に変わり、一部設備は動力化され、量的にも技術的にも著しい進歩を遂げた。我が国を代表する釣用品メーカーが存在する一方で、家内工業の零細企業も多く企業間格差は広がっている。

現在、産地の生産高は全国の約9割に達し、全国一である。

産地の特色として、加東市周辺が釣針の単体販売が主であり、西脇市周辺は主として内地向釣針を中心としており、精巧な擬餌針(毛鉤)等の生産も多い。また、一部の大手企業は、釣竿等関連分野への進出を活発に行っている。

「播州毛鉤」については、天保年間(1830~1844)頃に京都から製法が伝わり、江戸末期には、西脇市を中心に産地が形成された。

明治初期に数々の博覧会で賞を受けた手細工による優れた技法は、明治末期から大正にかけてさらに磨きかけられ、今日に伝えられている。

昭和62年4月に通産大臣（現経済産業大臣）より伝統的工芸品に指定された。

《団体（問い合わせ先）の状況》

兵庫県釣針協同組合 〒673-1334 加東市吉井731-2

TEL 0795(46)0022 FAX 0795(46)0104

播州釣針協同組合 〒677-0015 西脇市西脇990

TEL 0795(22)3901 FAX 0795(22)8739

兵庫県釣針協同組合ホームページ <http://www.hyoturi.or.jp>

播州釣針協同組合ホームページ <http://www.bantsuri.com/>

《事業活動》

(1) 兵庫県釣針協同組合

- ・主要原材料の共同購入
- ・新製品、新技術の開発、商品の高付加価値化と産地ネットワークの強化とPR
- ・公害対策(水質検査、etc.)人材養成などの研究会、討論会、研修会などの実施
- ・釣り大会、親子釣り教室などを開催する中、釣り人のマナー研修
- ・青少年育成事業（屋外事業、トライやるウィークの受入れ）

(2) 播州釣針協同組合

- ・金箔の共同購入。講習会(技術、経営管理)の開催

- 新製品、新技術の開発、需要開拓、人材養成事業
- “伝統的工芸品産業の振興に関する法律”に基づく「播州毛鉤」の振興事業
- 釣り大会、鯉、鮒の放流

参考URL

兵庫の地場産業（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/jibasan.htm
同上（食料品）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs01foo.pdf
同上（繊維）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs02tex.pdf
同上（化学・雑貨）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs03che.pdf
同上（窯業・土石）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs04pot.pdf
同上（機械・金属）	http://kdskenkyu.saloon.jp/pdf/jbs05mac.pdf
兵庫の伝統的工芸品（概説）	http://kdskenkyu.saloon.jp/tracrafts.htm
